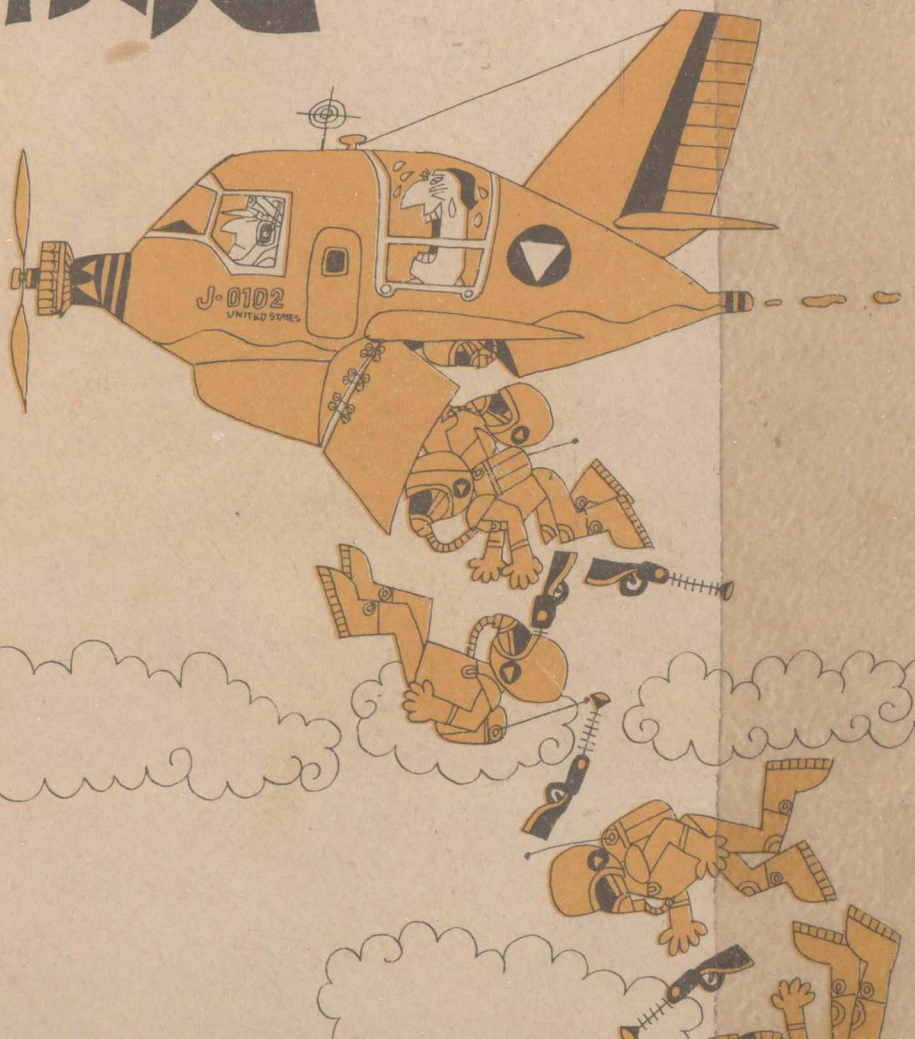


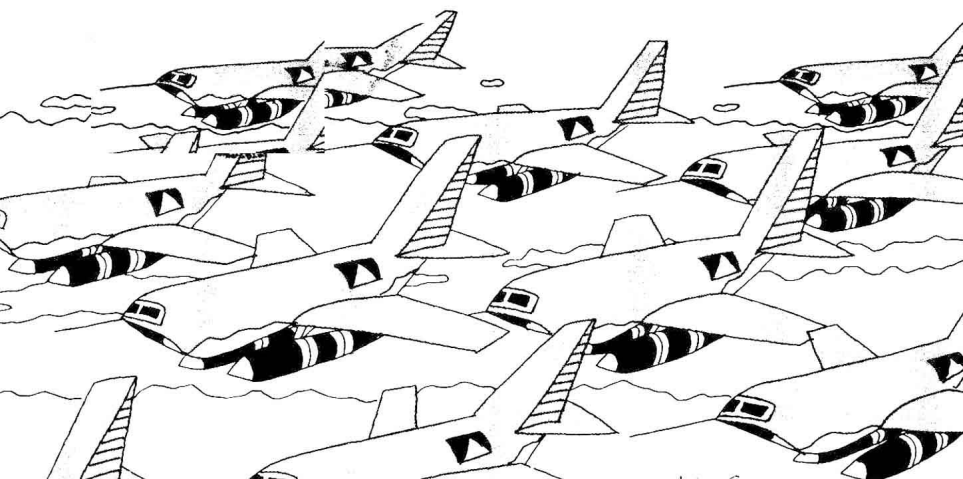
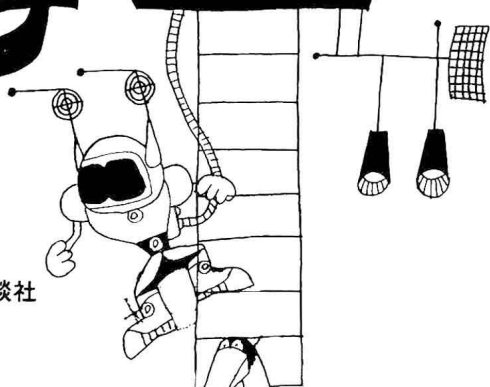
ポトラッチ 戦史

かんべむさし——講談社



ポトラッチ 戦史

かんべむさし——講談社





初出誌

ボトラッチ戦史（SFマガジン、昭和51年7月号）ママが死んだら（明日では遅すぎる、昭和51年12月号）家族同好会（新評、昭和51年9月号）勤務時間（別冊週刊読売、昭和51年11月増刊号）赤裸々なる將軍（奇想天外、昭和51年10月号）いかがでしょう（奇想天外、昭和51年9月号）ビジネス・タレント（小説推理、昭和51年7月号）還らざる彼ら（奇想天外、昭和52年1月号）

著者紹介

昭和23年金沢市に生まれる。関西学院大学社会学部卒。昭和50年末まで広告代理店にコピーライター等として勤務の後、作家として独立。西宮市在住。
著書、「決戦・日本シリーズ」「俺はロンメルだ」「サイコロ特攻隊」

ボトラッチ戦史

第1刷 昭和52年4月16日発行

著者 かんべ・むさし

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-112-21

電話 東京(03)945-1111(大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© 1977 MUSASHI KANBE Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。

(文2)

目次

ポトラッチ戦史	4
ママが死んだら	46
家族同好会	72
勤務時間	98
赤裸々なる將軍	126
いかがでしょう	160
ビジネス・タレント	190
還らざる彼ら	216

装帧 佐々木侃司

ポトラッチ戦史





「見えたぞ。遂に新大陸を発見した」

船べりで小手をかざして、コロンブスは叫んだ。長い航海の苦勞が吹き飛ぶようだった。

「さあ、どんな珍しい宝物があるだろう」

船はゆつくりと、後にアメリカと呼ばれることになる大陸の、西岸めざして進ん

でいく。

西岸？　そう、西岸なのだ。

このコロンブスは、意欲に燃えて船出して、イヨッ、国が見えると言ったあのコロンブスではなく、別の地球の、別のコロンブスなのだ。だから、あのコロンブスが前後四回の遠征で、常にカナリー諸島から西へ進み、バハマ諸島やキューバやハイチや、あるいはプエルトリコに至りながら、かんじんの大陸にはホンジュラス湾からパナマあたりに上陸しただけで終ってしまったのに対し、このコロンブスは初回からアフリカ南端をまわってインド洋に入り、この世界ではすでに発見されていたバスコ・ダ・ガマのインド航路を通じてカルカッタでひとやすみ。そのあと太平洋をつききって、もろにアメリカ西岸にぶつかってしまったのである。だからこそ、彼は船べりで「インドだ！」と言わずに、「新大陸だ」と叫んだのである。

ただし、そうなると当然、そこに住んでいる人間のことをインディアンと呼ぶことはなく、現にこのコロンプスも報告書にはそう書いてはいないのだが、混乱をふせぐためここではやはりインディアンと称することにする。

「インディアンが、うじゃうじゃいるぞ」

先頭に立って上陸した彼は、遠くで集まってこちらを注目している原住民を見て言った。

「いいか、友好的にいくんだぞ。友好的に」

彼は部下にそう指示し、自分自身もここに顔をつくって、彼らに近づいていった。

「やあ、みんな。今日は何とすばらしい日ではないか」

「そう、すばらしい日だ」

インディアン達の真中に立っていた、小柄な、しかし上品な威厳をそなえた顔の老人がこたえた。どうやら彼が酋長らしい。

「我われは友好的な客人を歓迎する。まして、あの青く広い大空の兄弟であり、夜空に輝く星をかぞえるより大変なほど数多い魚達の母であるこの海を越えてきた初めての男達だ。払う敬意は、山の頂きより高く、そこから昇る太陽より大きい」

「なかなか詩的な挨拶だな」

コロンプスはつぶやいた。

「だが、これだと話が進まない。実務的にいこう」

彼はにこにこ顔を崩さず、一歩前に出て言った。

「私はコロンプス。あなた方と宝物の交換をするためにやってきた」

「おお、それは嬉しい」

酋長はこたえた。

「我われはチヌーク族、そして私は“気前のいい熊”と呼ばれている。宝物の交換は大好きだ。季節もそろそろうってつけだ。ではさっそく、我われのところへ招待しよう」

「季節がどうとかって、何のことだ」

コロンブスは首をかしげたが、すぐ笑顔に戻った。

「ま、何でもいいや。貿易ができそうなんだから」

森をぬけ、川を渡って進むと、彼らの集落に到着した。

「た、隊長。変な物が立ってますぜ」

部下がへっぴり腰になって、集落の中央を指さした。

「何でしようね、面妖な」

「あれはトーテム・ポール。我われの守り神だ」

酋長が言った。

「部族結合の中心であり、ピラミッド状階層社会の頂点なのだ」

彼らは、トーテム崇拜を基盤として貴族・平民・奴隷の三階級に分かれ、狩猟と漁撈と採集活動で生計を立てる、豊かな部族なのだった。

「さて、さっそくだが」

コロンブス達を家に招き入れ、火のまわりに坐らせると、酋長は言った。

「どんな宝物をいただけるのかな」

「単刀直入な質問だな。話がてっとりばやくていい」

面倒な儀式や挨拶ぬきで貿易の話に入だったので、コロンブスはほっとした。

「それでは」

彼は部下に命じて荷物を開けさせた。

「まず、この美しいガラス玉を友好と、酋長への尊敬の念をこめて進呈しよう」

「おお、これはすばらしい。火に映えて光り輝いている。太陽にかざせば、七色の虹を発することだろう。ありがとうありがとう」

「お望みならば、我われの国からいくらでも運んでこよう。そもそも貿易というものは」

演説を始めかけたコロンブスを手で制し、酋長は言った。

「コロンブスよ、宝物の交換は古式にのっとって順序通りやろうではないか。次には私の返礼を受けとってもらいたい」

「ははあ」

彼は思った。

「なかなか義理がたい種族らしいな」

酋長は毛皮を出してきた。

「これは森の戦士と呼ばれた勇敢な狼の毛皮だ。私は彼と秘術をつくして戦い、遂に軍門に下らせたのだ。彼にとつて死は名誉であり、私にとつてこの毛皮を所持することは、彼に対する称賛の念が常に変らぬものであることのしるしなのだ。その一切の気持をこめて、これを返礼として贈ろう」

「これはこれは、結構な物を」

それから、コロンブスは鏡を進呈した。酋長は部族の紋章を刻んだ銅版をお返しにくれた。金貨をじゃらじゃら渡すと、儀式用の飾りのついた手斧トカボをくれた。

「イサベラ女王の肖像画ですぞ、酋長」

「夜の暗闇に住む悪魔を封じる護符であるぞ、コロンブス」

交換はいままでたつても終りそうになかった。コロンブスにすれば、その場の雰囲気から、なにインディアンに負けてなるものかくらいに気持で次つぎに品物を出していたのだが、相手は決してもう終りだとは言わず、それどころか、にこにこしながらあれやこれやと出してくるのだった。遂には、

「我が部族に伝わる秘曲である」

おごそかに言つて、朗々と歌をうたいだした。

「何のことだ？」

妙な顔をするコロンブスを見て、酋長は一瞬表情をかたくしたが、思いきつたように言った。

「それでは、いまの歌にカヌー五隻と熊の毛皮三十枚をつけて進呈しよう」

「ならば」

事情がよく分らないまま、コロンブスは対抗意識の条件反射でこたえた。

「こちらも、あの大きな船を一隻進呈しよう」

「ううむ」

酋長はうなり、やにわに立ちあがって表へ飛び出すと、広場の中央にあったトーテム・ポールをいきなり手斧で壊しはじめた。

「これでどうか、コロンブス」

「……？」

あつけにとられている彼を尻目に、酋長はトーテム・ポールを粉々に打ち砕き、つづいて奴隷を片端から殴り殺し、はては自分の家に火をかけて燃えあがらせてしまった。

「どうだ。これであの大きな船より価値は大きくなっただろう」

「おい、みんな」

コロンブスは部下に言った。

「どうやら、俺達は気違いインディアンを相手にしているらしいぞ」

だが、それは彼の無知からくる誤解だった。

酋長は、彼らにとつての当然の振舞をしただけなのである。これをポトラッチという。

ポトラッチとは、アメリカ太平洋岸、アラスカ南部からカナダにかけて住む、チヌーク、トリンギト、ハイダ、クワキウトルなどの部族が持つ慣習で、元来はチヌーク語で「消費する」という意味の言葉である。

彼らは、一年を二つに分けている。労働の季節である夏と、祝祭と消費の季節である冬である。

夏の間につくり貯えた財を、冬の行事Ⅱ婚姻や棟上式や身分地位の継承式において消費する、この2サイクルの連続で年月を送っているのである。

そして、この消費という行為が普通の概念とは違うのだ。消費は美德などといった生やさしいものではない、消費は權威なのである。

部族階層社会において、成員の榮譽と權威は、富の消費によつてのみ認められ、上昇する。有力者は何か集会や行事があるごとに、親族・縁者に財を分配し、贈与しなければならぬ。これは義務としての慣習法であつて、それを怠れば彼の權威はたちどころに失墜してしまう。みごとに義務を果せば、やんやの喝采で階級昇進を認められるかわり、不履行ならば面子を失つて奴隷に落とされることもあるという、真剣勝負の消費合戦なのである。多分、

「あいつは、あれだけポトラッチりよつたのに、平気な顔でにこにこしとる。こらあ、よっぽどの金満家やねんな。偉いやつちゃ、見あげたやつちゃ」

などという感嘆の気持と言葉が、この慣習の始まりだったのだろう。ところが、人間誰にも対抗意識というものがあり、なに俺だってあれくらいできるさ。いや、俺の方が肝っ玉はでかいぞという具合にエスカレートし、いつしかそれが義務となつてしまったに違いない。

その証拠に、消費が拡大されて浪費となり、遂には質の転換を招いて、破棄という行為にまで至つてしまった。

部族対部族の祝宴では、酋長どうしが威信をかけて富の破棄競争をする。片方の挑戦に対して、相手は必ずそれを受けて立つ義務があり、それ以上の破棄を返礼として実施しなければならない。カヌーを壊せばトーテムを燃やし、家を焼けば奴隷を殺してみせる。それだけでも、我われはビクともしないのだというところを見せあうわけである。

こうなると、具体的な品物だけではおさまらなくなってくる。多分、破棄競争に負けかけた酋長だろう、苦しまぎれに、抽象的な財を持ち出す奴が現われた。

「代々伝わる狐踊りだ。門外不出じゃったが、その禁を破って公開進呈する。以後はいつでも踊ってくれ」

「ううむ、それではこちらは齒痛を治すマジナイを進呈しよう。それ、イタイタイノトンデケエ」

これなら、口ひとつで価値をいくらでも付加できる。こうして彼らは、今度ああきたらこうでやろうなどと考えながら、毎年冬を待つわけなのである。これは本当のことなのであって、嘘だと思ふなら百科事典でも引いてみればいい。

さて、そこへコロンブスがやってきたのである。

「はあ、なるほど。そういうことなのか」

事情がのみこめて、彼は合点した。それから、一人でほくそえんだ。

「よし、これを国へ帰って報告し、女王や貴族にポトラッチを勧めてやれ。うまくいけば、財宝をたんまりもらえるぞ。いひひひ」

こうして彼は意気ようよう本国に帰り、さっそくそれを吹聴した。

「ポトラッチこそ、權威を示す最良の方法なのです。何よりも、富者にしかできぬところがいい。王者の遊びともいえましょう」

コロンブスが持ち帰った物が、アツという間に全世界にひろがったことは、我われの歴史でも明確な事実である。

たとえば煙草。一四九二年の十月、コロンブス一行はサン・サルバドル島で、贈物の返礼として土地の原住民から神秘の葉をもたらした。火にくすべてその煙を吸えば、火の神の精霊を体内に迎え、病も傷も治るというのである。これが五十年もたたぬうちに全ヨーロッパにひろまった。日本にも一五四三年、種子島に鉄砲とともに伝来したといわれ、慶長年間には全国にひろがって、女子供までが吸っていたという。徳川幕府が成立してからも、やれ身体に悪いの火の用心がよくないのと何度か禁令を出したが、ひろがった習慣は止めようもなく、結局うやむやに終わっている。

また、梅毒も元もとは西インド諸島の風土病だった。それをコロンブス一行の誰かがヨーロッパへ移入したのが、蔓延まんえんの始まりである。あの病気は、極少の例外を除いて、直接接触によって感染するものであり、ということは一行為の誰かが、ひょっとしてコロンブス自身が文字どおり身をもって伝えたわけで、なかなか意欲旺盛というかこらえ性がないというか、とにかくえらいことをしてくれたものである。何しろ、翌一四九五年、シャルル八世のイタリア侵入を機に大流行し、ヨーロッパ全土にひろがってしまい、そのうちの誰かが東方航海の乗組員だったらしくてインドやマレーにも伝わり、一五一二年には華南をへて日本にも上陸し、近畿地方に「唐瘡」という名でひろがっているのであ

る。そして翌年には関東で流行したという記録がある。まったく、人種国籍を問わず、行く先ざきで確実に行動してくれたものである。

さて、

そんなわけで、このコロンブスが伝えたポトラッチも、初めはじわじわひっそりと、途中からは急速に、遂には爆発的な勢いで全世界にひろがってしまった。

金持どうしがやっていた。貴族と貴族がやっていた。王と王が始めるようになり、時代が進めば「朕は国家なり」で、つまり王は国家であって、国対国のポトラッチ合戦になるのは、当然のなりゆきだった。

七年ポトラッチ。アメリカ独立ポトラッチ。阿片ポトラッチにクリミアポトラッチ。東洋では日清・日露のポトラッチで日本がその権威を高め、遂には第一次世界ポトラッチなどという、四年余りも世界中がポトラッチに我を忘れる状態さえみだしたのである。



「生きるに値すると同様に、死にも値するときがきた」

挙国一致ポトラッチ遂行内閣の首相に就任して、チャーチルは言った。

「我われは権威を守らねばならないのだ」

史上空前の大ポトラッチが終ってわずか二十年で、またもやそれが始まってしまったのだ。今度はいつまでつづくのか、誰にも見当がつかかっていた。

世界の強国が国力の持てるだけを傾けて参加した第一次世界ポトラッチ。そのきっかけは、オーストリアが自国の皇太子をわざわざサライエボ訪問中に自から殺して、

「どうだ」

自慢してみせたのが始まりだった。ドイツやフランスやロシアが連鎖反应的に受けて立ち、当然、富と権威では譲ったことのない大英帝国も参加を表明する。どうせ半年かそこで片がつくだろうと思っていたのが目算違い。ドイツは毒ガスだの機関銃だの、新発明をくり出して気前よく国民を殺してみせ、

「いかがかな」

したり顔で「世界に冠たるドイツ」などと歌うのである。対抗上、イギリスもガスを使い機関銃を使い、ポトラッチ防止に送りこまれた女スパイ、マタ・ハリの妨害にもめげず、気前のよさでは一歩もひかぬところを見せたのだが、さすがに二年三年とつづくとも富も底をつき始める。この上は財を名譽と伝統に求めて、恐れ多くもキング・ジョージ五世を弑逆したてまつらねばならぬ。いくらドイツ人が頑固でも、返礼としてウィルヘルム二世を殺してまで対抗はしないだろう。時の首相ロイド・ジョージがそう決心しかけた頃、新興大国アメリカがドイツに対して参加を表明し、イギリスには財を貸してくれるわ、自からも気前よくポトラッチするわ、ようやくドイツに継続をあきらめさせたのだった。

そして、あまりの馬鹿ばかしさに考えこんだ各国が国際連盟をつくり、パリでポトラッチ防止条約を結び、何とかチヌーク族における夏の季節を維持してきたのが、ここしばらく前までの情勢だったのである。

ところが、ヒトラーというポトラッチ好きが現われた。この男はかつて浮浪者だったこともあるくらいだから、自分自身はポトラッチしようにも財を持っていない。そこで、まわりを焚きつけて国家ぐるみで再度ポトラッチをしようとしたくらゐ、演説をぶった。

「前のポトラッチで負けたのは、ユダヤ人が富の破棄を嫌がったからだ。まったく、ユダヤ人という

奴は誇りを持たぬ奴らだ」

「我われは世界一の人種なのだ。さあ、今度こそ、アーリアン・ポトラッチというものを見せてやろう」
すっからかんになっていた国民、面子を失って屈辱を忘れかねていた貴族揃いの軍、それに、ポトラッチのために富や財をつくれれば自分達もそのおこぼれにあずかり権威が高まると考える産業界が、この短絡的再ポトラッチ論に飛びついた。

ヒトラーは着々と富を形成し、来るべきポトラッチのための材料として領土も拡張し、何しろ国を挙げて「夏の季節」の充実に進進した。イギリスでは、チャーチルなどがポトラッチ不可避を主張したのに、首相チェンバレンは、夏を伸ばせば冬は来ないとばかりに、ひたすら譲歩策をとっていたのである。

そしてとうとう、ヒトラーは一方的にポトラッチを始めてしまった。

「余はポーランドを破壊した。さあ、どうする」

ここに至ってイギリスとフランスは、義務慣習として受けて立たざるをえず、遂に第二次世界ポトラッチが開始されたのだった。

フランスは国土の半分以上をドイツに贈呈して太っ腹なところをみせ、ドイツはお返しに、国内に強制収容所を作って、国民を能率よく大量に殺し始めた。

「これはよほど本気で対抗しないと、光輝ある大英帝国の面子が丸つぶれだぞ」

国民の声は日ましに高まり、チェンバレンは辞任し、そして、断固たるポトラッチを主張するチャーチルが、首相となったのだった。

ヒトラー、ムッソリーニ、チャーチル、ルーズベルト、スターリン、そしてトウジョウ。

役者が揃い、ポトラッチはどんどん大規模なものへと、ひろがっていった。